

## <サンプル>

### 頚動脈内膜切除術と頚動脈ステント留置術の周術期・長期的血圧変動の比較

<sup>1</sup>五十嵐 崇浩、<sup>1、2</sup>酒谷 薫

日本大学医学部 脳神経外科学系 <sup>1</sup>神経外科学分野、<sup>2</sup>光量子脳工学分野

#### Comparison of blood pressure change in patients during CEA or CAS

<sup>1</sup>Koji Igarashi, <sup>1,2</sup>Kaoru Sakatani

<sup>1</sup>Division of Neurosurgery, Department of Neurological Surgery, <sup>2</sup>Division of Optical Brain Engineering, Nihon University School of Medicine

**【緒言】** 頚動脈高度狭窄病変に対する頚動脈内膜切除術（CEA）、頚動脈ステント留置術（CAS）は血栓性塞栓症を予防するという効果を持っているが、治療に伴う頚動脈圧受容体（BR）に対する影響は異なると報告されている。BRは急性期血圧管理に影響を与える因子だが、BRの血圧に対する影響がどのぐらいの期間持続するのかは不明な点が多い。本研究では両者の周術期の血圧変動を比較するとともに、頚動脈狭窄治療後の長期的な体血圧への影響について検討した。

**【方法】** CEAは2001年9月～2008年8月、日本大学医学部脳神経外科にて施行された46例（症候性38例、無症候性8例）、CASは2004年1月～2010年12月、相模原協同病院脳血管内治療科にて施行された77例（症候性45例、無症候性32例）を対象に術前、術直後、術後1日～7日、退院日、術後3、6、12ヶ月の体血圧、服薬状況を調査した（入院中は午前8時に、退院後は早朝時測定した値を採用）。

**【結果】** CEA、CASともに術前に比べて術後は体血圧が低下しており統計学的有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）。CAS群とCEA群の比較では術直後～術後6日までCAS群のほうがCEA群に比べて体血圧低下が著しく両群間で統計学的有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）が、術後7日以降は差を認めなかった。長期的には両群ともに術後12か月（CEA:  $p < 0.001$ , CAS:  $p < 0.01$ ）でも有意に降圧効果を示した。

**【考察】** 頚動脈狭窄患者は健常人に比べてBR感受性が低下しており、CEA後は低下もしくは不変で、CAS後は亢進する事が報告されている。急性期の血圧低下はこのBRの影響が示唆された。また、CAS後はBR感受性亢進により低血圧・徐脈を認めるが約1週間でこの影響が軽減すると推測される。術後12ヶ月まで降圧効果を示したのはCEA、CASともに脳循環改善による影響が示唆された。